

『一天四海皆歸妙法』の理想を奉じて、他國民をも指導し、閻浮第一の大願を成就せん事に勉めざるべからず。



編輯の後に

人の生活は、その内面にも亦外面に於ても、其人の環境や、その社會の傳統的の種々相に影響されて、人格そのものゝ上に種々の相異した結果を齎すこと、それは免れ難き事實である。又複雑した精神生活の内容を有つ所から、そうした感受性に富む人と乏しい人、そうした外界に對する服従性、妥協性の多い人、少い人等と、限り無く多くの階級を認め得る。

思想界の變潮も、政体に對する變革も、制度習慣の更展も、乃至は信仰界の覺醒運動等も、皆悉く斯うした事實の發現に他ぢらぬ。於此有する社會の指導者、先覺者は自分の率ゆる民衆に對して

先憂後樂の責任ある理解者であらねばならぬことは言ふ迄も無い。

何處の國へ旅しても、何處の家庭を眺めて見ても、老若の人々が互に無理解と、頑固と、我儘に色々の貌を執つて諍ふて居るのを看る。此の事は直に社會の改造と思想界の變潮とを物語るものである。而も是等の實際が任運的に極く順調に進んで往く事もあつたが、現在及將來には、少くとも我々の文化史が過去に有つ巴上の激越な調子を探るべきは、火を燎るより明がである。或人が言ふた様に輿論は愚論であるかも知れぬ。然し現在人の生活の事實が上下を擧げて、輿論の勢力で抱擁する迄に悲惨に成つて來た。個人の智識開發にのみ偏重して施して來た教育の効果が、斯ふした一種の民本的成果を結んで來たのが現代思想界の事實である。

數年に涉つて善に又惡に、色々の結果に世界全体の國家民衆に覺醒と波動とを與へた歐洲の大亂は、遂に歐洲のみに止まらず、我々の社會にも又

個人の自由の上にも直接數多の問題を將來された現下の日本として、目覺む可き多くと、爲すべき數多、又導くべき用意の數多くを有する事は當然である。然し私は斯ふして文明批評的の立場に於て、自分の主張を語る時では無かつた。

販はしとも言へぬ作品の編輯に従ふて、斯ふした澤山の靈場裡に、無地の着物に袈裟衣、制規通り一定の姿整に纏（纏うて居ると云ひ度いが、實際は纏はれて居ると云ふた方が真に近いらしい）はれた人々の間にも、上に述べた思想史的動亂の渦が種々の形、程度に顯はされて居るのに驚いたのである。世にも人にも智者學匠と頌はれて、其人の安心が以信代慧と始めて成り、四海歸命の爲め捨身の弘法と絶呼して、眞實私腹を肥すと云ふ二つの事實を同一門流に認め得たならば、墨染の清い法衣を着けた身にも、煩惱の炎火が赫々と燃ゆるのに、其處に何の不思議を觀やうぞ。慎しむべきは行方を知らぬ逍遙である、指導者なき煩悶である、更に更に意すべきは無批判的の屈從承服

である。此の如きを力なき生活と呼び、無主義の徒と目するのである。

現代が批判主義の時代であるならば、日蓮主義者中、殊に其宣傳者は批判主義に立脚した信念本位の人であらねばならぬ。現代の思潮として現實改善を生命として基礎を立つるから、日蓮聖人の御教は現代に於ける社會の相性体を眞實に理解した信行本位の成佛論であらねばならぬ。徒らに理智の苟安を貪つて、事大主義的安心を得て其れで成佛が可能から、後五の佛識何の要否、聖祖の教判觀、觀心説そも何するものぞ。空しく權勢に阿叟して僧位を貪り、盲者の如く教經に迷ひ、傳習に服し新來に眩ふが爲め、正像已弘の諸宗門、悉く是れ無得道とこそ示し給へ。宮殿の如き僧院も稻麻の如き僧輩も、實人性の何等に觸れず、恐れ多くも佛意に反す、此處に人性の根本に光輝ある生命と能力とを認め、漲る感激の裡に一切衆生は本佛慈愛の靈光に悟り、信受決定の生活に本佛應用の自己を觀る……噫、大なる哉、本化の説教!!

立教の根本、乃至信仰界革命の要求が、斯く發瀾たる生氣に、充ちたそれである。安佞と屈從と背恩（佛恩に對して）とを更に許さぬ所に、本宗は基礎して居る。

作品を通じて顯はれた多くの會員に『信徒の手前斯ふしては』『ア、云ふ人々には』と、常々信徒（それは殆ど総てが傳習の結晶である）を遇する如く、遠慮勝ち、極端な偽善的の假面を見るのを遺憾とする。そうした生氣あひ自己發表が、御自身的人格の上に根基を有せず濟めば、自分の痛心は杞憂に終るが、恐らく……と思ひ煩ふ。活きた宗門、否な負ふた宗門を活かすも殺すも互の責任だ、過去の歴史が語る様な怠惰の循環を耳にする要は、吾々に無い。傳習への盲従は退歩を産み、僞飾の發展は滅亡を速める。如上の蕪言は嚴格な立場から呼號して、次には我々の文學部あるもの（具體的に『棲神の』）同精すべき實狀の理解の下に更に冗説の必要を認める。

▲投稿の制限が示す通り、作品は所有る種類より成つてゐる。純

教學上の研究もあれば、瞑想的思索から成つたもの、社會問題時事問題の論策、感想もあり詩詞もある。而も是を部類別にする程に、作そのものも純でない。従つて教學的研究の作品も、論策も詞藻も、分類せずに編輯した。

▲自分の方針は、一般會員の作品は全稿を見て取捨を決する。従つて前號迄の未完部は掲載の責任を自分が専ら有つ様にも出来る、今後の方針の一部さしても一寸言譯旁々發表して置く。

▲本誌の目下の事情が語る如く、本誌の使命は純乎たる確立に迄で向上してならぬ。即ち同窓會の機關雜誌であり、會員間の流布本に止まつてゐる。其處に布教的文字の物を多く採らぬ理由を有つ。編外佳作で川口の「佐渡參拜旅行記」を惜しくも除いた、而も辻の「信仰と安心」は載せた。特に思想、主張、詩文の如きは此の間の苦じさを多く含む。荒木の「秋の雨」銅子の「基督教に於ける矛盾」其他に證左が多い。何れは別巻に就て語らう。

▲有力な信徒方の理解ある物資的應援でも少しあれば、或は布教雜誌として稿を列れ、或は純教學鑽研の機關とも爲らう。其の時の到る迄で、種々の意味で不満足乍らに、總ての方面に筆鋒を磨いて頂き度い。

▲但し今回の事實は明かに教學的作品に最も多くの寛容を看るであらう。是は會員同志の會報でふ立脚で、より多く教學的努力の刺戟と問題とを起させ度くあつた故である。

▲思索に馳せて詞姿を顧みず、文章字句に滞つて思想的探索の足

らざる、兩者何れも不可、而も其の何れをも多く手にした自分である事を残念乍ら告白して、後轍の誠めに供へて置く。

▲治生産業皆順正法と説かれた經文は明かに法華經が社會生活上に活きてゐる所である。文學の業は雅人や閑人の道樂では無い吾人傳燈の徒に取つて文學の努力は正しく五種法師の書寫行であらねばならぬ。文學部の理想が遠大に、その實現が最近に、更に部員諸子の内容の充實をこゝ切に祈つて闡筆する。

(宗祖涅槃會慶祝十二日夜)

降誕會記事

春の野山に饜麩いた霞に包まれて、碧瑠璃の如き岩清水、眞白な蓮華、淡紅の梅花、種々な瑞相に迎へられて、賤が伏屋の微笑んだ一嬰兒が纏て日本國の柱、杖、眼目、大船にならうとほ！聖者の追慕は信力である、實算六十高峯によりて御父母を偲ばせられ雲煙を御瞻望遊ごされた、此の身延に集ふた吾々は今茲に第六百九十七回の聖誕を壽ぎ奉り一層追憶を新にしたのであつた。例年の如き祝賀會も本年は木の香幽しき新築校舎で催された爲か特別の温かさ賑はしさであつた。校舎内外の裝飾は總て嶄新な意匠に成り、先づ中一の作たる大縁門を入れば校庭には縱横萬國旗を張り一段の盛觀を添へた。

午前八時、師徒一同祖師堂に於て嚴肅な一場の法筵を営み、後三々五々各自參拜人の接待役に付いた場内には青紅白の蓮華を點綴し數間の中空に掲げられしは面貌圓滿の多福十間四面に紅白

の幔幕打張りしは高等部生の甘露接待所今日の嘉會に列せんとして集まれる夙縁薰發の衆心身共に醜醜の極味に酔ひ、法悅滿面として室内に入る。第七教場に入れば中等部二年の催しにかゝる身延山高座石七面天女示現の飾物六老四檀を始め、驚天動地の穴垣狼一滴の法雨に狂悦せる七面の蛇身、參觀者一同六百年前の法座に連りしが如く説明辯士の熟舌に酔ひ一語も發する者はなかつた先づ近來の大傑作であつた、次は第六教室中等部三年同五年の一部の作にかゝる由比ヶ濱訣別の揚山法師が海坊主に成らんことした不自然さは當然で何となく殺風景であつた、然しながら教ゆるもの傳ふるものは師弟の道と孝子の範で、只味ふ可き作であつた。

第六教室は中等部四年及五年一部の合催小室善智法印歸伏の場萬事風雅な背景で、毒を仕かけた萩の餅さも知らう苦がない、嬉しまさげに頂戴した斑犬は吐血してグンナリへたばつてゐる、邪鬼に苦しめる法印は平伏して深刻なる悔悟をしてゐる、又愛す可き作であつた。尙階上登口には如說修行者熱原甚四郎の大幅等皆參觀者をして瞪着たらしめた。又第一、二、三の教場は當日の講演場並に六十餘點より成る選所展覽所に充てられ午後より龜口教授中村講師の講演あり、來會者七百有餘名同五時一同の大努力で無事終了を告げた。更に同六時學生一同大客殿に會して祝賀茶話會を催し併せて選書賞典授與式あり、中高兩部の總代演説あり引續き同八時から法喜堂にて數番の餘興あり、著音機聖傳浪花節、西洋大奇術、新舊合併仁輪加清正公御利益現代宗教劇「嵐のあざ」